

笑顔を創り出すことから生まれる存在意義

目次

1. はじめに
2. 動機
3. ディスカッション報告
4. 結論
5. 過去、現在、未来の私とこのテーマの関わり
6. おわりに

1. はじめに

みなさんは「**笑顔**」とは何だと思えますか？笑顔を広辞苑で引くと、「笑みを含んだ顔。わらいがお。」と出てきた。笑顔にも「とびきり」の笑顔、「愛想笑い」の笑顔、「自然とこぼれる」笑顔など様々あり、かつ、人によって笑顔も違う。100人いれば、100通りの笑顔がある。そう考えると笑顔は単純そうで、奥が深いように思う。

また、同様にみなさんにとっての自分の**存在意義**とは何でしょうか？楽しいことばかりではない人生において、自分の生きがいともなる存在意義が見出せるものが人間には何かしらあると私は考える。家族や友人、恋人、勉強、趣味、仕事など、それは人それぞれだと思う。

しかし、存在意義の定義を「自己が他者や共同体から認められていること」という意味で捉えると、「アイデンティティー」と言い換えることも可能かもしれない。私の言葉で存在意義を言いかえると、他者から何らかのサインがあり、そのサインによって他者から認められることを、自分でも認められたと感じることである。私にとってそのサインこそが、「笑顔」なのだ。

私にとってこの「笑顔」と「存在意義」は密接に結びついている。そしてその笑顔とは自分自身の笑顔ではなく、他者の笑顔を創り出すことを指している。自分の言動や存在が、他者に何らかの影響を与えて、笑顔を創り出す。そしてその他者の笑顔を見ると、私も嬉しくなり、笑顔になる。そして、その事実が自分自身の存在意義につながっているように感じるのだ。これから、動機やディスカッションを通して、「笑顔を創り出すことから生まれる存在意義」がなぜ、私のテーマになったのか明らかにしていこうと思う。

2. 動機

人を笑顔にする。その笑顔にする相手は家族であったり、友人であったり、恋人であったりと割と自分に身近な存在がまず始めに挙げられるであろう。もちろん身近な存在である人達を自分の言動で笑顔にすることで、自身の必要性を実感し、存在意義にもつながることもあるかと思う。

しかし、私はあえて全く知らない人、自分に関係がない人こそを笑顔にすることが重要かと思う。なぜかという、その方が難しいからである。全く知らない人に対して警戒心なく、笑顔を見せることなんて、そう簡単に、また頻繁にあることではない。難しい分、その人を心から笑顔にすることができたならば、本当に自分自身の必要性、存在意義につながると私は考える。「知らない人を笑顔にする機会とはどんな時であろうか・・・」と考えた時、真っ先に思い浮かんだのは、「困っている人を助ける時」だと思った。そう考えたら、過去に困っている人を助けられなかった出来事があった。

それは私が大学2年の時である。大雨であったその日、目の前に白杖をついて横断歩道を渡ろうとしている人がいて、その人が視覚の障害を抱えているであろうことは明らかであった。しかし、その道路は車の交通量が多く、渡るタイミングを見計らっていたのだが、雨の音で環境音を聞き取れなかったのか、うまく渡れないでいた。しかし、その光景を私はただ後ろから見ていただけしかできなかったのだ。何度も何度も「声をかけて一緒に横断歩道を渡ろう」と思ったのだが、それを頭で考えるばかりで実際に行動にうつすことはできなかった。私はその時、目の前に困っている人がいるのに、手を貸すことすらできないなんて、なんて私は心の小さい人間なのだろうと感じたのである。そして、後悔ばかりが残った。これからまた同じような状況が起こったら真っ先に話しかけて手助けしたい！と思ったのが障害について興味、関心を抱いたきっかけである。

そうして、私は大学にて「健康福祉支援工学ゼミ」という、いわゆる障害者を支援する、そして障害者の生活環境を改善するためのユニバーサルデザインについて考えるゼミに入った。そのゼミに入ってから多くの障害を抱えた人と接してきた。車いすを利用してい

る方のお手伝いをし、聴覚に不自由がある方のノートテイクをして、少しずつ手助けできるようになってきて、その人が私に満面の笑顔で「ありがとう」と言ってくれる。その時私自身も嬉しくなるのを感じた。客観的にみれば、自分が助けている立場なのだが、逆に私が、必要とされていることで精神的にも支えられているかのように感じたのだ。その時、私は自身の存在理由は、人の笑顔を創り出せた時に感じるのかもしれないと考えた。

3. 対話報告

自分のテーマについてより深く考えるために、私は2人と対話をした。自分とは異なる意見を持っているかもしれないが、相手の意見を聞き、違う角度からも、このテーマを捉えることが必要だと感じたからだ。この対話によって自分のテーマが明確になればと思った。

1人目は友人のSさん。彼は保険会社に勤めている。直接的ではないけれど、病気や亡くなった人にお金を支払うといったことで間接的に支援していると捉えることができる。支援することに対して、どう考えているのかを対話を通して探っていった。まず、私のテーマに対するレポートを読んでもらい、そこから対話を広げていった。

私：このレポートを読んでどう思った？

Sさん：いいことだと思う。表面的ではなくて人を心から笑顔にできるのって難しいけど、その分できた時の喜びは確かに大きいよね。

私：保険会社に勤めて、仕事をしていて、「人を助けているなあ」と実感することはある？

Sさん：うーん。あんまりないかな。でも保険の必要性を伝えることで改めてお客様に命の重要性を伝えて、私のおかげで保険を見直すと言ってくれた時には、少なからず助けたというか、役に立ったのかな？と感じる時はあるよ。

私：私は「保険とは間接的に人を助ける」という印象が強いけど、直接的に助けた時との感覚の違いや思うことの違いってある？自らが犠牲になってないじゃない？

Sさん：保険会社の仕事で直接的に助けるといったことはできないと思う。正直なところ、営利企業であるからには「保険を売る」ということが仕事の一つだから。保険金を支払うということで助けているということになるかもしれないけれど、自らが犠牲になってお客様を助けているという感覚はないかな。

私：じゃあ逆にSさんだったらどこまで犠牲にできる？

Sさん：時と場合によるかな。見返りを求めるわけではないけど、感謝される気持ちと、自分が犠牲になる分が釣り合っていないと、行動できないかな。困っている人を助けたいっていう気持ちは人間みんな何かしらあると思う。だけど関係ないことに巻き込まれて自分が犠牲になるほど助けようという意欲はないのかもね。

私：私は人の笑顔を創り出した時に喜びを感じたり、生きがいを感じる人が多いんだけど、それについてどう思う？

Sさん：いいことだと思うけど、笑顔にするのっていろいろな方法があると思う。例えば笑わせたから笑顔になったのかもしれないし、何かをやってくれてありがとうっていう笑顔かもしれないし。だからもちろん笑わせて笑顔にすることもいいことだと思うし、感謝されてありがとうっていうのもいいことだよ。だけど、それはどういう時に笑顔になってくれたから嬉しいっていうのを抽象的ではなくて、具体的に考えたほうがいいと思う。

最終のレポートとして私のテーマは考え抜いた末に「笑顔を創り出すことから生まれる存在意義」であった。しかし、そのテーマに決定するまでは私の根底のテーマは「生きがい」であると感じていた。

しかし、Sさんと対話してみて、人を笑顔にすることに喜びを感じる人は私だけでなく人間みんなが持っている感情だとわかった。Sさんも他人を笑顔にするまでとはいかないが、自分がした行動で人から感謝されることで、喜びを感じ、それが生きがいにもなっていると言う。でもそもそも「生きがい」とはそれがなくては生きていけないほど大切なものという意味であり、そのために生きていくという解釈もできる。本当に人から感謝されることが生きがいなのだろうか、と私は疑問に思い始めた。自分を犠牲にしてまで人を助

けることはできないと考える人が多いこの世の中。本当に人を助けること、そして感謝されることが生きていく上になくってはならないものである人なんて存在するものなのか？Sさんが言うように、犠牲と感謝される気持ちが平等で釣り合っていなければ、助ける人はそんなに存在しないのではないのだろうか。むしろ、自分が犠牲になりたくないというのは自己中心的な考えでは全然なくて、当たり前の感情なのかもしれない。

たしかに、自分が他人の笑顔を創り出せたら、喜びにつながる。興味も感じるし、もっと私が行動することで、他人が笑顔になれば、幸せだとも感じる。しかし、それが生きがいになっているかと言われれば、答えは今の時点では「NO」かもしれない。それがなくては生きてはいけないと実感したことはない。

Sさんとの対話を通して、私のテーマは生きがいではなく、存在意義という捉え方なのではないかと考えるようになった。その点で、Sさんとの対話は大変有意義なものであった。

2人目は私のゼミの先生である。先生は障害を抱えている方を、技術や環境や機器をテーマとして、よりよい支援の在り方を考えている。障害という、生活する上で困難な状況も多い人を助けて、笑顔を創り出している仕事をしているので、対話することで新たな発見を得られるかもしれないと考えた。

私：障害者の方に限らず、困っている人を助けることによって、その人が笑顔になる。そして、その笑顔を見ることで助けた私自身も嬉しくて笑顔になることがあります。先生は、今の障害者支援のお仕事をしていて、そのように感じたことはありますか？

先生：あります。最初は誰かを助けたいという想いで、ボランティア精神で今の仕事を始めました。だけど、仕事をしていくうちに、それは違うと思い始めたんです。実は僕らができることってそんなに多くなくて、むしろ関わっていく中でその人達のほうが輝いているように感じました。だから徐々に「助ける」というのはおこがましい、むしろ僕が持っている技術でその人の生活の一部を支えるという考え方にシフトしていきました。もちろん支えたことによって結果として笑顔になり、力になれるかもしれませんが、だから逆に支えられていないかもしれません。大切なのは僕らがその人を変えようとするのではなく、その人が変わろうとしているのをお手伝いすることです。「助ける」より「支援」のほうが近いですね。

私：支援するにも、自分が犠牲になる部分もある？

先生：たしかにボランティアの考え方ならば「犠牲」という考え方はあります。でも私は「プロフェッショナル」として仕事でやっているから犠牲はないです。

私：先生にとって笑顔とは何ですか？

先生：うーん。笑顔は結果です。笑顔は鏡です。人の笑顔を見ることで、自分も笑顔になるという意味で笑顔は鏡だなと感じますね。

私：私は人を助けたことによって、私を必要としてくれたということから、自分の存在意義にもつながるかなと思うんです。

先生：まったく同じですね。「存在意義」や「役割」ですね。その中で存在意義や役割が見いだせれば、その人のパワーにもなる。役割がなければ意欲がなくなってくる。それは、支えられている人も同じです。支えられているだけでは、生きている意味を見失ってしまう。それは具体的に家族との役割ですね。お年寄りや障害者でも、テレビのチャンネルを変えろという役割を与えるだけでも、自分の居場所を見出すことができます。「今、自分、生きてる」って感じられるんじゃないですかね。

私：じゃあ、存在意義にもつながるのに、困っている人を助けられない人もいるのはなぜだと思いますか？

先生：自分は助けたつもりでも、その人にとって結果的に助けられるか助けられないかはわかりません。助けられないのは、その人は助ける術を知らないだけなのだと思います。僕は誰もが存在意義を模索していると思います。助けようとしていると存在意義ってなかなか見つけられないものであって、ふとした時に感じるものだと思います。

先生と対話をして新たな発見があったと共に、自分のテーマが明確化されたように感じる。私は困っている人を助けたい、自分の言動によってその人を助けて、負担を軽くしたいという考えを持っていた。だからこそ、このテーマも生まれた。しかし、それは自分のおごりなのかもしれない。先生のおっしゃる通り、自分は助けたつもりかもしれないが、本当はその人にとっては助けてもらったという自覚はないかもしれないし、むしろ助けなかったほうがその人にとってよかったのかもしれない。私は先生から話を聞き「ありがた迷惑」という言葉を連想した。結局、助けた自分自身が助けたという事実で満足するだけで、相手にとっては迷惑なのかもしれない。相手の本当のニーズを読み取っていないことからこの矛盾が生じるのかもしれない。だから、相手が本当にしてもらいたいことを読み取って、手を貸す。そして、結果としてその人が笑顔になればいい、という考え方にシフトするべきなのだと感じた。人の笑顔を見たいために、助けるというのは順番が違うのだと先生に気付かされた。

助ける、その人に役割を与えることで、存在意義につながるというのは、私だけでなく、他の人も同様ののだとわかり、さらにテーマが明確になった。そして必ずしも、それは支援する側だけの考え方でないこともわかった。障害があり、家族に介護をしてもらっている方は、「自分は介護ばかりしてもらって、家族に何も返してあげられない。むしろ、自分がいることで迷惑をかけているのではないか。」と思悩む人も世の中にはたくさんいる。障害者だけでなく、高齢者もしかりである。その人たちにテレビのチャンネルを変える役割や、花に水をあげる役割、挨拶する役割など、どんなに小さな役割であっても、その役割を与えてあげるだけで、その人はまるで今までと輝きが違う。自分が生きていると、その役割があることによって実感できるのである。これは大切なことであると思う。自分が存在している意味を見いだせたら、素敵なことである。誰もが存在する理由はあると思う。しかし、なかなか自分自身で見つけられないのが実際である。他者から必要とされる、「ありがとう」という言葉をかけてもらえるだけで、自分の必要性を他者から認められたような感じがする。その必要性を実感することが存在意義につながってくる。これは私だけでなく、支援する人も支援される人も同様であり、人類みんなに共通する部分なのではないかと、先生との対話を通して改めて感じる事ができた。

4. 結論

「笑顔」。私は笑顔とはすごく素晴らしいものであると思う。人は嬉しい時、楽しい時、笑う。時には感動して笑顔になることもあるかもしれない。人生のうち、笑顔でいる時間が長ければ長いほど、充実した楽しい人生になるし、泣いている時間より、笑っている時間

が長いほうが、魅力的だと私は考える。何事も楽しんだもん勝ちだと思うから、私は常に笑っている人間になりたい。そして自分自身だけではなくて、他人の笑顔を創り出すことができれば、なおさら素敵なことであると思う。人を表面的ではなく、心から笑顔にすることは容易なことではないが、それができたならば、人を笑顔にする＝幸せを提供した、ということになるのではないか。たとえ、自分が犠牲になってでも、他人の笑顔を創り出すことができれば、私はその事実によって笑顔になれるとも思う。それほど、私にとって「笑顔」は大きなテーマなのだ。

私は人の笑顔を見ることが好きである。人が笑顔になることが、嬉しくて自分も笑顔になる。逆に自分が笑顔でいることで、相手も笑顔になったらそれも嬉しいとも思う。「笑顔は幸せの好循環」だと考えるようになった。

しかし、「どこまでの範囲の人を支援して、笑顔を創り出して自分の存在意義を見出したのか、社会全体を幸せにしたい？」とグループの人に指摘された。そう考えてみると、私は社会全体を支援して、笑顔を創り出そうと、そこまで大きく捉えていないと思う。自分と直に接する人を支援して、その人の笑顔をこの目で直接見ることができる。私は、自分のコミュニティの中で人の笑顔を創り出していきたいのだと思う。もちろん、社会全体を幸せにできれば、スケールが大きい分、他者からも自分の存在を認められ、存在意義も大きくなるかもしれない。しかし、自分の周囲を笑顔にできなければ、社会全体を笑顔にできるはずがないと思う。だから、自分のコミュニティの範囲で笑顔を創り出すことを目標にしていきたいと思う。

でも、笑顔を創り出すことに限定しなくても、存在意義は見いだせるかもしれない。相手に笑顔はなくても「ありがとう」と言われたら、それもそれで嬉しく思う。しかし、やはり笑顔がプラスされることによって充足感は大きく違うと思う。人は見た目が9割とも言うように、視覚から得られる情報は大きいのである。だから、私は笑顔を強調したい。笑顔は嘘をつけないとも思う。心から嬉しい、感謝している時に生じる笑顔は創れるものではないと思うのだ。だから、本当の笑顔を創り出すこと、それが存在意義につながると私は感じるのだ。

5. 過去、現在、未来の私とこのテーマの関わり

過去、現在、未来を通してこの「笑顔を創り出すことから生まれる存在意義」について考えてみようと思う。

過去の私・・・他人を笑顔にしたいという明確な想いはなかった。それよりもむしろ、自

分自身が幸せになりたいからこそ、自分が笑顔でいたいと考えている子どもだったように思う。だから、自分が熱中できることに思い切り取り組んできたし、たくさん遊んでもきた。だから私は泣いたり怒ったりしているよりも、笑顔が多い子どもであったように思う。しかし、自分が笑顔でいることで、周りの人間も笑顔でいた時間のほうが多かったような思い出がある。今のテーマとは少しずれるかもしれないが、自分が笑顔でいることで、周りにも笑顔を提供しているという見方もできるかもしれない。過去の私と笑顔はそのような関係性であった。

現在の私・・・現在、私は福祉のゼミに所属しており、障害を抱えている人たちと関わる機会も多い。そんな状況の中で私はこのテーマが自分自身の抱えているテーマだと確信した。もちろん、このテーマについて考えている現在の私はこのテーマと深く関わっている。

未来の私・・・正直、このテーマが未来の私にどのような影響を与えているのかわからないのが実際である。時代も変われば、人の考え方や興味、関心も変わる。幼いころから抱いていた興味が今も変わらず自分の興味関心事だと自信を持って言える人のほうが少ないのではないと思う。しかし、このテーマがはっきりと未来の私に影響してはいなくとも、心の根底にある考えなので自分の言動に「人を笑顔にしたい」という想いはあると考える。

6. おわりに

この講義では自分の興味、関心をテーマにして、それをグループの中で対話活動を通して、明確にしてきた。私の最初のテーマは「障害者」であった。しかし、グループで対話し、グループの人に「なんでそう思うの？」とか「どういう経緯があるの？」などと、他人からの意見や突っ込みも頂き、初めに掲げていた興味関心と最終的に今のテーマは大きく変わった。

この講義の目標としては「ことばの市民になる」であった。この言葉を初めて聞いたとき、抽象的で意味すらわからなかった。しかし、「ことばの市民になる」ということに対して今となっては少し理解できるようになったかなと感じている。講義を通して、私なりの解釈なのだが、今まで知らなかった人と様々なテーマについて対話をする。その対話を通して人それぞれ、いろいろな意見があることを知り、それに対して「そうだよね～」と共感したり、「それは違うんじゃない？」と意見をぶつけ合ったりする。その対話活動を通して、自分の価値観は大きく変わる。このことこそ、ことばの市民になるということなのではないだろうか。この講義には日本人や、他国の人も多くいる。人種なんてことばの市民には関係ないのである。人は知らず知らずのうちに、誰しもがことばの市民なのである。よく「コミュニケーションは大切だ」と言われるが、それは多様な意見、価値観があるこ

とを実感するために、相手と対話することとしてコミュニケーションという言葉が使われるのではないかと考えるようになった。

今後も多くの人と積極的に対話をしていき、より、深いことばの市民になろうと思う。